



String Orchestra
Eternita
7th Concert

弦楽合奏団
エテルニータ
第7回コンサート
2010. 6. 20 (日) 2:00p.m.
とちぎ男女共同参画センター
パーティホール



PROGRAM

- 1 パヴァーヌ・シャコンヌ ト短調／パーセル
Pavane und Chaconne g-moll/H. Purcell
- 2 フルート協奏曲二短調 Wq. 22/C. P. E. バッハ
Konzert für Flöte und Orchester d-moll Wq. 22/C. P. E. Bach
フルート:川上哲朗
- 3 弦楽セレナーデ ハ長調 Op.48/チャイコフスキー
Serenade für Streichorchester C-dur Op. 48/P. I. Tchaikovsky

川上哲朗

1987年東京生まれ、宇都宮で育つ。

フルートを12歳より始め、大島美智恵、崎谷直、瀬尾和紀、佐藤真由、フィリップ・ピエルロ、ミシェル・モラグスの各氏に師事する。

第25回栃木県学生音楽コンクール管楽器部門第1位。
宇都宮短期大学附属高等学校音楽科を卒業後、渡仏。

リュエイル＝マルメゾン市立地方音楽院のフルート科シユベウールクラスをpremierprix(1等)、室内楽クラスを木管四重奏でtres bien(最優秀)を得て卒業。ニース音楽アカデミーにおいてマダム・クロード・ルフェーブルのクラスを修了。

フランス、日本においてバロック、ジャズからタンゴまで様々な演奏活動を行っている。



パーセル

「パヴァーヌ・シャコンヌ ト短調」

わずか36才という短い生涯を閉じたヘンリー・パーセルは、イギリス最大の天才作曲家である。彼の死後、ロンドンで出版された歌曲集には「オルフェウス・ブリタニクス」(イギリスのオルフェウス)と表記されているが、このタイトルは、パーセルの人気の高さを示す好例と言えよう。

オペラ「ディドーとエネアス」は不朽の名作であり、他にも魅力に富んだ美しい響きをもつ多くの舞台作品や教会音楽を残した。ヴィオール合奏のために書かれたファンタジア集にも、5声部の1声がたった1音(ドの音)をずっと弾き続ける「1声上のファンタジア」とか、パッ

ヘルベルのカノンにそっくりな低音主題を持つ「グラウンド上の3声」といった興味深い作品がある。

「パヴァーヌ・シャコンヌ ト短調」も同じくヴィオール合奏のために書かれたもの。もともと別々の機会に作られた2つの曲を、調性が同じためつなげて演奏をするようになったと思われる。

「パヴァーヌ」は16世紀前半スペイン起源のゆったりした舞曲で、くじゃく(pavo)の動きをまねた2拍子で踊られる。「シャコンヌ」も同じくスペイン起源の3拍子の舞曲で、最初に低音楽器で演奏される8小節の主題の上に、何度も変奏を展開していくのが特徴である。

C. P. E. バッハ

「フルート協奏曲二短調 Wq. 22」

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハは、大バッハの次男として1714年にドイツで生まれた。ベルリンのフリードリヒ大王に仕えたので「ベルリンのバッハ」、また後年ハンブルクの教会のオルガニスト兼楽長となったので「ハンブルクのバッハ」とも呼ばれている。

彼はチェンバロの名手でもあり、この「フルート協奏曲」も始めは「チェンバロ協奏曲」として自分で演奏する目的で作曲した。のちに、チェンバロの上声部をほとんどそのままフルートで演奏できるようにアレンジされたが、それが作曲家自身の筆であるかどうかはわかっていない。曲名のうしろにあるWq.というのは、アルフレッド・ヴォトケンヌという人の作成した作品目録番号だが、「チェンバロ協奏曲二短調」も「フルート協奏曲二短調」も同じWq. 22という番号が与えられている。

第1楽章 アレグロ

父から受けついで見事な対位法的スタイルで作られているため、エマヌエルの作品にしてはバロック風に聞こえる。おそらく、雇い主のフリードリヒ大王の好みに合わせたのかもしれない。大王は新しいスタイルをあまり好んではいなかったのである。

第2楽章 ウン・ポコ・アンダンテ

幾分長目の弦楽合奏のみによる主題提示のあと、独奏フルートが穏やかで美しい旋律を奏でていく。

第3楽章 アレグロ・ディ・モルト

「感情多感様式」と呼ばれる彼の音楽が見事に表れた、激しく斬新で大胆な表現に満ちた急速な楽章。ヴィヴァルディの「四季」の嵐の音楽と似ているようにも思えるが、よく聞くと、時代はすでに古典派の世界に突入しているのがわかりになるであろう。

チャイコフスキー

「弦楽セレナーデ 八長調 Op. 48」

弦楽合奏のために書かれた作品の中でも屈指の名作で、人気度も高い。1880年に完成、翌年ペテルブルグで初演され大好評で迎えられた。

チャイコフスキーはモーツァルトを心から敬愛しており、パトロンであったメック夫人にあてた手紙の中に、「この作品はモーツァルトに対する私のオマージュです。私は彼のスタイルをまねようとつとめました。」と書いている。さらにモーツァルトの作品、例えば「アヴェ・ヴェルム・コルプス」などを下敷きにした「組曲 第4番 “モーツァルティアーナ”」という曲も手掛けている。

第1楽章 「ソナチネ形式の小品」

モーツァルトの音楽を手本に書いたとはいえ、あくまでもチャイコフスキーの個性豊かな音楽となっている。力強く雄大な序奏が特に印象的であるが、16分音符で軽やかに動き回る第2主題も魅力的である。

第2楽章 「ワルツ」

チャイコフスキーのワルツ好きは有名で、おなじみの「花のワルツ」(「くるみ割り人形」の中の1曲)を筆頭に多くのワルツを残した。西洋的ワルツの優雅さとロシア風の哀愁が合体した魅惑的な楽章で、その美しさのためしばしば独立して演奏される。

第3楽章 「エレジー」

教会旋法的な和声付けがなされており、前の2つの楽章よりロシア的な臭いが濃くなっている。しかし、エレジー(悲歌)とはいっても二長調で書かれているから、決して感傷的になりすぎることはない。

第4楽章 「ロシア主題による終曲」

アンダンテの序奏は、第3楽章が二長調だったのでト長調で開始され、主部に入ってやっと本来の八長調に戻る。ロシア古謡の「青いリンゴの木の下」に基づく主部は、舞曲風のもの。最後に第1楽章の序奏主題を堂々と再現させることによって、全体の統一をはかっている。

MEMBERS PROFILE

ヴァイオリン

青柳敬子

宇都宮短期大学卒業。
増田貴子、星野和夫、吉村成司、鈴木鎮一の各氏に師事。
才能教育研究会宇都宮支部ヴァイオリン科指導者。
スズキアンサンブル「弦」メンバー。

片山淑子

国立音楽大学卒業。
在学中、故久保田良作氏に師事。卒業後、ソロ、室内楽を浦川宣也氏に師事。後進の指導にあたっている(札幌在住)。

小松崎倫子

武蔵野音楽大学卒業。宇都宮大学大学院修了。
故 鈴木史子、吉村成司、萩原耕介の各氏に師事。
宇都宮市立陽東中学校教諭。

駒橋博美

東京音楽大学卒業後、フリーランスのヴァイオリニストとして、オーケストラ、室内楽などのクラシック・コンサート出演や、ミュージカル、ジャズ、タンゴバンド等での演奏活動を行う。
現在鹿沼在住。宇都宮フィル、鹿沼フィルハーモニー・ゲスト・コンサートミストレスを数年間務めた。
獨協医科大管弦楽部弦楽器トレーナー。
オーケストラ・シンポジウム・メンバー。

篠原香乃子

武蔵野音楽大学卒業。
モダンヴァイオリンを、故 永岡国雄、吉村成司、星野和夫、掛谷洋三、桐山建志の各氏に、バロックヴァイオリンを桐山建志氏に師事。
後進の指導にあたる他、フリーの奏者として活動中。
下野楽遊「奏楽塾」メンバー。

土屋恵子

上野学園大学卒業。
増田貴子、吉村成司、竹内茂の各氏に師事。後進の指導にあたっている。

福富恵子

宇都宮短期大学卒業。
吉村成司、鷺見健彰の各氏に師事。
柿の木幼稚園ヴァイオリン講師、後進の指導にあたっている。

山田美津子

東京都立大学卒業。
同大学管弦楽団にて山口裕之氏の指導を受ける。ヴァイオリンを星野和夫氏に師事。

ヴィオラ

川沼文夫

宇都宮短期大学、東京芸術大学別科卒業。
立花和夫、吉村成司、鷺見四郎、中塚良昭、鈴木鎮一、豊田耕児の各氏に師事。
才能教育研究会宇都宮支部ヴァイオリン科指導者。
スズキアンサンブル「弦」メンバー

川俣洋子

国立音楽大学卒業、同大学大学院修了。
ヴァイオリンを岩本政蔵、井上武雄、鷺見健彰、鷺見四郎、石橋洋子、梅津南美子の各氏に師事。
室内楽を青木十良氏に師事。
フリーの演奏家としてオーケストラ、室内楽等で活動の他、後進の指導にあたっている。
アンサンブル・プリランテメンバー。

福田真智子

フェリス女学院大学音楽学部器楽学科、東京音楽大学大学院音楽研究科科目等履修生卒業。これまでに、駒橋博美、百武由紀の各氏に師事。ハイリゲンベルク夏期国際音楽アカデミーにて小林秀子氏のマスタークラスを受講。現在、洗足音楽大学オーケストラ特別給費研究生。

チェロ

荒川育子

国立音楽大学卒業。
後進の指導にあたっている。
室内合奏団、オーケストラ等でも活動中。

コントラバス

増山一成

東京芸術大学卒業。ウィーン国立音楽大学に留学。
沖不可止、今村清一、江口朝彦、小野崎充、ルートヴィヒ・シユトライヒャーの各氏に師事。
読売日本交響楽団コントラバス首席代行、東京ハルモニア室内オーケストラ コントラバス奏者、宇都宮短期大学附属高校音楽科非常勤講師。

ゲスト首席チェリスト

諸岡範澄

国立音楽大学附属高等学校、国立音楽大学器楽科卒業。
1993年ブルージュ国際古楽コンクール・アンサンブル部門第一位受賞(Trio van Beethoven)。パツハ・コレギウム・ジャパン、有田正広、P・ヘレヴェッヘ、A・ピルスマ、クイケン兄弟ら、内外の演奏家と数多くの演奏会、CDレコーディングに参加。モダン・チェロ奏者としてもソロ、室内楽等の分野で活躍するほか、作曲も手がける。
1999年第13回古楽コンクール・山梨の審査員を務める。
韓国国立ソウル芸術大学におけるバロック音楽セミナー講師として、また漢陽大学学生による「コレギウム・ムジクム・漢陽」の指導者として招かれ、毎年訪韓している。東京五美術大学管弦楽団、オーケストラ・ムジマ、東京女子大学カレッジストリングス指揮者。ひたちなか楽友会講師。オーケストラ・シンポジウム音楽監督。

エキストラ

ヴァイオリン 奥村りん

ヴィオラ 星由紀子

チェロ 沖澤直子

ステージマネージャー 小林俊夫(日フィル)

